

阿部知二が描いた"北京"

著者	王 成
雑誌名	日文研フォーラム
巻	第166回
ページ	1-59
発行年	2004-09-01
その他のタイトル	Abe Tomoji's depiction of Peking
URL	http://doi.org/10.15055/00005666

第165回 日文研フォーラム



阿部知二が描いた“北京”

Abe Tomoji's Depiction of Peking



王 成
WANG Cheng

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公開を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 山折 哲雄

● テーマ ●

阿部知二が描いた“北京”

Abe Tomoji's Depiction of Peking

● 発表者 ●

王 成
WANG Cheng

首都師範大学助教授

Associate Professor, Capital Normal University

国際日本文化研究センター外国人研究員

Visiting Research Scholar, Int'l Research Center for Japanese Studies



2003年10月14日 (火)

発表者紹介

王 成

WANG Cheng

首都師範大学助教授

Associate Professor, Capital Normal University

国際日本文化研究センター外国人研究員

Visiting Research Scholar, Int'l Research Center for Japanese Studies

略歴

1998年3月 博士（立教大学）

1987年8月 北京第二外国語学院講師

1998年9月～首都師範大学助教授

1999年3月～北京日本学研究中心客員助教授

著書・論文等

「日本后現代主義文学の旗手—島田雅彦（日本ポスト・モダン文学の旗手—島田雅彦）」『外国文学』2001年

「夏目漱石文学在中国的翻訳と影響（中国における夏目漱石文学の翻訳とその影響）」『日本語学習と研究』2001年

「『虞美人草』における修養主義の言説」『国際交流における日本学研究—21世紀への新視点』アルク、2000年

「修養理念としての則天去私—『道草』『明暗』の目指す方向」『立教大学日本文学』2000年

翻訳『小説的方法』（大江健三郎著）河北教育出版社、2000年

はじめに

北平の南京に対する地位は、丁度東京にたいする京都のやうなものである。北平と京都はいづれも古い都であつて、その周囲には、南京や東京のやうな新しい首都に見られない一種の香氣と神秘、歴史的な魅力、と云つたものが漂ふてゐる。南京や東京が新時代、進歩性、産業主義、国家主義等を代表するのに反して、北平こそは、永く培はれて来た穩やかな古い支那の魂を代表するものと云つてよい。そこには好ましい生活と申し分のない暮らしがあり、最大限に恵まれた文化的慰安と、田舎風の生活の最大限の美との關係が、完全に調和されてゐるのである。

（林語堂「古都北平」『改造』「支那事變増刊号」一九三七年十一月）

この文章は中国の現代作家である林語堂が蘆溝橋事件後、日本軍に占領された北京を惜しむ心情で綴つたエッセイです。古都を讚美する文字は故郷が蹂躪されることを痛む心から生まれたのでしょう。北京と京都との比較から書き出したこの文章は、読者に、もし美しい京都が外国の軍隊に占領されたら、どう思うだろうという問いかけを日本人にむけて投げかけたものでしょう。美しい古都が占領で滅びようとしていると思えば、

その魅力をより一層懐かしく思う気持ちは、中国人も日本人も同じでしょう。

かつて、私は、美しい古都北京への愛着を表現した林語堂の文章を読んで、感動したことがあります。今度、日文研の外国人研究員として、憧れの京都に滞在することになり、これをきっかけとして、北京と京都を比較したこの文章をもう一度読むことにしました。そして、日本の作家は、北京をどう表現したのだろうという問題に関心を抱くようになりました。

調べてみると、近代日本の文化人は北京について、数多くの作品を残していたことが分かります。例えば、徳富蘇峰の『支那漫遊記』（大正七年六月 民友社）、中野江漢の『北京繁昌記』（大正十一年 支那風物研究会）、芥川龍之介の『支那遊記』（大正十四年十一月 改造社）、服部宇之吉の『北京籠城日記』（大正十五年七月 服部宇之吉刊）、阿部知二の『北京』（昭和十三年四月 第一書房）、清水安三の『朝陽門外』（昭和十四年四月 朝日新聞社）、奥野信太郎の『隨筆北京』（昭和十五年三月 第一書房）などが、挙げられます。それは旅行や留学、あるいは従軍報道などの形で、直接、中国の大地に足をのぼすことによって、書かれた作品であります。さまざまな角度から北京を表象した作品の中で、文学作品としてよく知られているのは、やはり芥川龍之介の『支那遊記』と阿部知二の『北京』だと思います。

ところが、文学史を読んでも、研究史を振り返ってみても、横光利一の小説『上海』（昭和七年 改造社）に比べて、『北京』に関する研究は少ないようです。どうも、文化研究の分野では、植民地でありながら、モダニズムを生み出した都市空間としての上海に較べて、封建王権の都としての北京は近代の都市空間論として論じにくいためか、注目度も低いようです。しかし、ロンドンやパリやベルリンを描いた小説に比べると、中国と日本をめぐって、民族や歴史、国際政治や文化など複雑な関係を描いた小説として、『北京』は、さまざまな問題を含んでいます。とくに、一九三〇年代は、近代中日関係史上、最悪な時代であります。その時代に、書かれ読まれた文学作品として、『北京』は、どのように北京を表現したか、まだ明らかにされていないのです。そこに潜んだ問題を、我々は今日なおひきずつているように思われます。本論では『北京』の研究を通じて、阿部知二の文学における「北京表象」を解明していきたいと思っております。まず、最初にあらすじを見ておきましょう。

東京のある私立大学の講師である大門勇は元明清代の、「西教」を中心とする東西の文化交流を調べるといふ名義で、一九三五年の春に北京に来たものの、晩夏初秋を迎えて、予定を切り上げて急に帰ろうとしていました。北京をさまざまな角度から観察し、北京の人々と交流するうちに、大門は美しい古都北京に魅せられてゆきます。

大門は昔日本の商社の「買弁」をした王世金の家に寄寓しています。王世金は三人の夫人を持っていて、第三夫人の子供の家庭教師の女性にまで手を出して自分の愛人になっています。日本による華北侵略の機運の下、王世金は活躍のチャンスを狙って、自分の家の一部を日本料理屋にして、日本に協力をして利益を得ようとしています。

王家の息子である王子明は日本や英国に留学して、北京のある大学で哲学の教師をしています。大門と親しくなつて、二人は日中関係など、日中の知識人が共に直面している問題を議論します。大門は王子明を通じて、中国の若い知識人の苦悩を理解しようとなつて努力します。それは、日本の勢力（侵略）が北京に迫りかかってきた時に、反抗的に行動するかどうかという現実問題です。王子明は中国伝統文化や西洋文化の教育を受けた若い知識人として、「頹廢」的な一面をもつていながら、抗日運動に参加するようになっていたのです。

大門は北京の街角で大陸を放浪する教え子の加茂と再会し、加茂から中国大陸で関東軍の通訳となり、満州、蒙古で従軍し、満鉄関係の仕事をしてきたことなどを聞かされました。加茂はいま通信社に勤める沼の仕事の手伝いをしながら、通訳の試験を準備しています。加茂は中国の農民の中に潜入して、農民を自覚させて、大陸の変革のために、行動する熱意に燃えています。東洋のために、祖国のために、青春と熱血を捧げたいと

いう加茂は、大門の目には「右翼的」とも「左翼的」とも一言では決めにくい青年です。大陸で抱負を実現できない限り日本には戻らないと豪語した加茂は、万里の長城からの帰りに、大門を下級の淫売窟に誘つて、一夜を明かします。その帰りに加茂は疲れ果てた老人力車夫を殴りつけます。大門と別れた加茂はそれきり消息を絶ててしまいます。その加茂の足取りを探すために、大門は沼とともに人力車夫の住む貧民窟に踏み込み、その悲惨な現実を目のあたりにします。沼に誘われた大門は高級妓楼に上がり、そこで鴻妹という妓女の魅力に惚れ、ついには出発のチケットを破ってまでして、鴻妹との一時を過ごしました。北京を離れる前夜の中秋節に、大門はもう一度恋しい鴻妹に会いに行き、頹廢的な感情を味わいました。

北京の街に魅せられた大門は、日本人の仲間から「北京村の聖者」などとかかわれ、ヒューマニズムを堅持して行動してきたものの、自分もまた日本人として、とうとう、「加害者」の仲間入りをしたのに気付いたのです。北京を離れて大連に滞在した大門は新聞で、日本軍の侵略により緊迫する華北情勢を知る一方、友人の手紙を通じて、鴻妹が北京から消えたことを知らされます。

一 記録文学としての『北京』

阿部知二は一九三五年九月一日から十三日まで、二週間ほど北京に滞在しています。帰国してから、北京の印象記や観察記をエッセイにして、新聞や雑誌に発表しました。例えば、『読売新聞』の文芸欄に発表した「隣国の文化——北平の印象から」（一九三五年十月二十六、二十七、二十九日）に、「私が書かうとするのは、その『東洋の故郷』ともいふべき支那と、この吾々の日本とに、西洋の文化がそれぞれのやうに侵入したかについての（前にも断つたやうに）旅行記的な印象だ」と述べ、中国古代の知恵を再発見し、そこに伝統と現代の融合を感じたと述べたのです。彼は中国での体験や観察を通じて、近代文明がもたらした歪みを克服するヒントを得た、というような発言もしたのです。この旅行経験を踏まえた中国観察記には、そのほかに「支那の眼鏡」（『文化学院新聞』一九三五年十月二十五日）、「北京雑記」（『セルパン』一九三五年十一月）、「北京から新京へ——日記帳より——」（『月刊文章講座』一九三五年十一月）、「美しき北平」（『新潮』一九三五年十二月）などがあります。

北京を題材にした最初の小説は『文芸』（一九三七年一月）に発表した「燕京」です。その次は『文学界』（一九三七年五月）に発表した「北平の女」です。蘆溝橋事件後の

一九三七年九月には「北平眼鏡」（『改造』増刊号）を発表しています。

一九三八年四月に出版された『北京』は「燕京」を約三倍に書き伸ばして出来た長編小説で、それまで書いた北京に関する作品をその材料としたものです。一九三五年秋以来、蘆溝橋事件後の日本軍による北京占領という事態に直面した阿部知二は、積もり積もった北京への思いを、一気に放出して、作品に織り込んだのです。

すでに、あらずじで見たように、『北京』は主人公の半年間にわたる北京滞在を全体の枠組みにしています。主人公が北京を去るまでの何日間を縦の時間軸に、その行動や人間関係を横の軸にして、物語は織り出されています。この作品について、阿部知二は「自作案内」という文章で自分の創作意図や方法を次のように解説しています。

その後北京に行った人々は、お前の見たやうな呑気な街ぢやない、といふ。だからこそそれを描きたい。せめて、あの時の美しい街の雰囲気の千分の一でも、これも行と行との間に立登る句としてあらはせたら、と念ずる。さて、この「北京」では、何を私は追求しようとしたか。（中略）一つは、ただわけもなく、この私といふ一個の生身の人間の感覚、感受性に触れてきたその街の空気、色、匂、花、物、音、人の顔、建物さういったものを、筋も思想もなく、ただ感覚的にあらはしたい

といふ欲望。一つは、やはり、眼をつむり耳をふさいでも、迫ってくるあの地のあの時代の氏「民？」族的關係の現実。（中略）私は、「記録文学」といはれるところの新しい方法論を知らず、また必しもそれをしようとも思はない。昔ながらの旧態依然たる文学心で小説を書くことしか念じてゐない。

（『文芸』一九三八年三月 『阿部知二全集』第十卷 河出書房新社 一九七四年十月）

また、『北京』の跋にも、自作案内を書いています。

この小説は時局的文章ではない。一九三五年の秋のはじめの「北平」を場面とした、ひとつの感傷紀行録であり、幻想曲であるにすぎず、やや遠慮しながらの支那觀察記といふほどのものにすぎぬ。さらに断わつて置かなければならぬのは、ここに描かれた「北平」は、過ぎた日のそれである。西欧の古い詩人の言葉を藉りれば、「去日の美女」の面影であらう。

（『北京』第一書房 一九三八年四月）

この小説が発表された時、日本による中国侵略戦争はすでに全面的に展開され、日本

国内では戦時体制が整えられつつあり、この年の四月一日には『国家総動員法』が公布されて、言論統制が厳しくなります。阿部知二は繰り返して、この作品の主眼が「あくまで『文学的』」なところにあつた。読者も、その心持でみてもらへるならば幸せである。今日の眼から見れば、日支間の事象に対する考へなどには、間違つたところ、滑稽なところすらあるではあらうが、私はただ、その過ぎた日に、旅人としての自己が、この心を感じたままを書いたのである、といふことを以て、支へとしたい。敢て支那を描いたといはない。私の心に映つた支那を描かうとしたのだ」（『北京』一九三八年四月 第一書房）と説明したのです。阿部知二は明らかに「検閲」を意識していたと思われます。作者は北京旅行の印象や観察をその時の心情に即して書いたものだと言調したが、読者はむしろこの文章から、作者の自己体験と「事変」後との断絶をはっきり意識していたことを読み取れることでしょう。

二 北京の都市空間

地名の政治性

さて、阿部知二の北京に関する一連の作品は、その題名に、「北平」、「燕京」、「北京」

と、三つの地名を使っています。同じ『北京』の中でも、「北平」と「北京」との両方が使われています。これは何を意味するのでしょうか。

戦国時代から燕京と称されてきたこの町は、金の時代から何回も都に定められました。貞元元年三月辛亥、上至燕京……乙卯以遷都詔中外、改燕京為中都。”と『金史』の「海陵記」に記されたように、正式に建都してから、当時の燕京は中都と改称されました。貞元元年は西暦の一一五三年となり、「三月乙卯」は四月二十一日です。以来、金、元、明、清、の五つの王朝の首都とされました。金の時代に中都と称し、元の時代は大都と呼ばれ、明の時代は、最初に北平と称していましたが、一四〇三年（永樂元年）首都を北平に移して、これを北京と改称したのです。清朝も北京を首都としていました。一九一二年四月、中華民国臨時政府の首都とさだめられましたが、一九二八年六月二十一日、中華民国は首都を南京に定めたので、北京は「北平」と改称されました。蘆溝橋事件後、一九三七年十月十三日、日本軍が支持した中華民国臨時政府（傀儡政府）は北平を北京と改称したのです。このような地名の変更からも、民族と民族の戦いの歴史や中国の内戦の歴史や外国による侵略の歴史が窺われます。幾度にもわたる改称から、時代に翻弄された北京の歴史を垣間見ることができます。

阿部知二はこうした状況を踏まえて、また、自分の歴史認識に基づき、物語の時間に

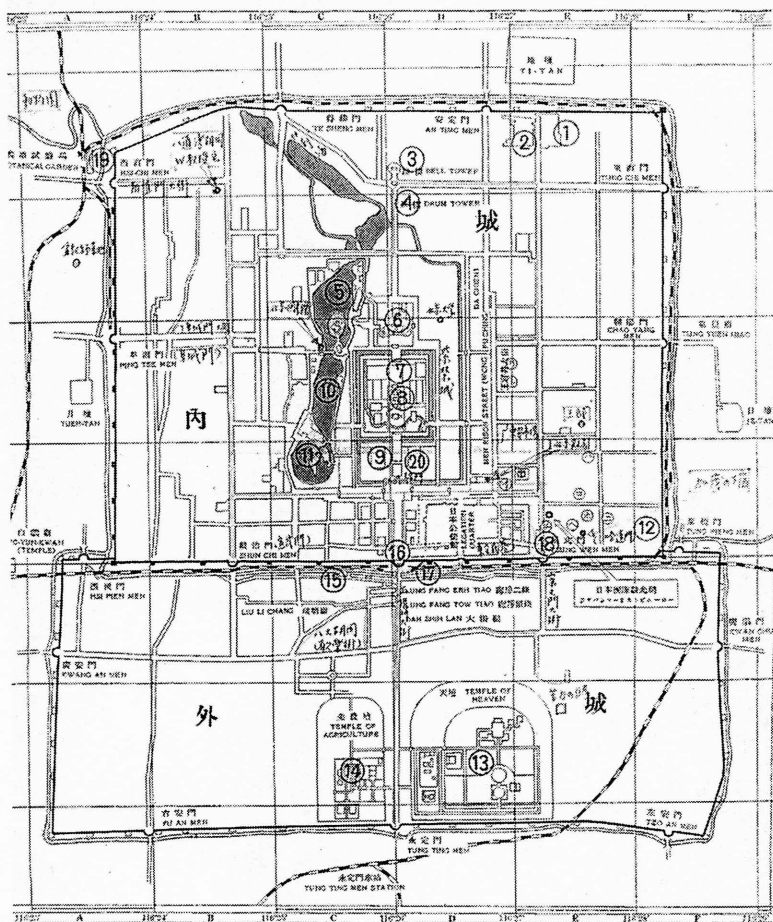
そくして、小説のタイトルを選んだのでしよう。その小説の題名に使われた地名の選択に、すでに阿部知二の北京の歴史への思いが刻まれています。

『北京』の都市空間

『北京』は主人公である大門勇が下宿した家Ⅱ「東城の一胡同の王邸」の「豪奢な」空間の記述からはじまります。この王邸を拠点にして、大門は北京を観光し、人々と会いそこから、旅先のさまざまな物語が生まれたのです。

この舞台の設定は作者自身の旅の経験に基づいています。阿部知二が北京（当時は北平という）から帰国した後、新聞や雑誌に発表した北京旅行のエッセイの中で、例えば、「美しき北平」（『新潮』一九三五年十二月）は、「W氏の邸は遂安伯胡同といふところにある。隣には無量大人胡同といふのがある。胡同とは蒙古語からきたので、露地といふのださうだが」と、自分の下宿した邸を書き記しています。また、阿部知二が北京から送った妻宛の手紙も残っていますが、その発信地は「北平東城遂安伯胡同九号 黄宅」と分かっています（『阿部知二文庫目録―阿部知二遺族寄贈・寄託資料―』姫路文学館一九九五年三月）。

蘆溝橋事件後になると、東單牌樓から燈市口に至る間の胡同は日本人経営の料理店や



北京郊内名所

地图①

喫茶店などの指定地域とされ、阿部知二の居た時、この界限では日本人が急増します（地図①）。この現象は、事件に先だつて小説の中で、王世金が大門の下宿した部屋を日本料理屋にする計画を実施する設定によつて、予告されていたのです。それでは、この邸宅とはいかなるものだったのでしょうか。

王邸について、次のように描かれています。

広い邸の入口の中央に、豪華な応接室があり、その奥には第二、第三、第四夫人——第一夫人は亡くなつてゐた、——の房が、樹木の中に並び、さらにその廻りに、親戚、召使、息子王子明の家と、合計五十人にも近いもののある家が並んでゐた。こちらの庭隅に、洋風の数間が離れて立ち、昔は世金の愛妾を入れたところだつたが、つい先頃までは日本の某中佐がゐた。そこに大門は入つたのだが、少し日本語も分るボーイもそのまま残つてゐたので都合がよかつた。（一章）

この描写から「買弁」商人、王世金の豪華な生活ぶりが窺えます。この邸は伝統的な北京の建築様式である「四合院」でありますが、その離れに洋風建築が建てられるという設定は、伝統と現代を無理矢理に融合したものです。王家の「四合院」の離れに洋式

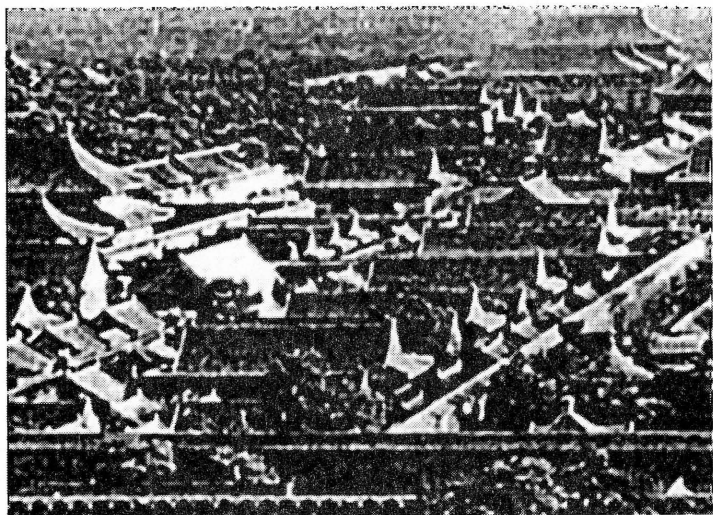
の建物が造られているという空間構造は、半植民地時代の「買弁」の性質の象徴的な表象となっています。北京はそれ自体が、金の時代から明清を経て、八〇〇年間、帝王の都として造営されてきた一つの巨大な四合院だと見えます（写真①②）。立体的に北京を見て、正陽門を「垂花門」とすれば、紫禁城は「正房」である母屋となります。紫禁城自体も大きな「四合院」であります。この巨大な「四合院」には、阿片戦争以来、特に、義和団事変（北清事変）後、日本を含めて、列強諸国がその一隅に領事館や銀行や兵舎を建てて、治外法権地域を作り出したのであります。その西洋化された東交民巷地域はまさに、王城の離れに建てられた「洋風の数間」であります。小説に描かれた王家の邸は北京の空間構造を圧縮したように構想されたと考えられます。

全盛期の王世金の豪華な生活ぶりは、大門の目を通して住居の空間描写によつて描き出されています。

広い、天井の高いその室の、壁の高いところについてある窓から、白々と光の束がながれこんできて、この龕のやうになつた寢処の紅と金色の蝙蝠を縫ひこんだ緑の帳を照らし、白蛉を防ぐ金網を射し通して、寢牀の奥の紅いシェイドの枕電燈と、朱の枠のついた枕鏡の辺りまで、仄あかるませてゐた。この寢処は、この邸の主人



写真① 正陽門から北京の町を眺める



写真② 夕陽に映える紫禁城

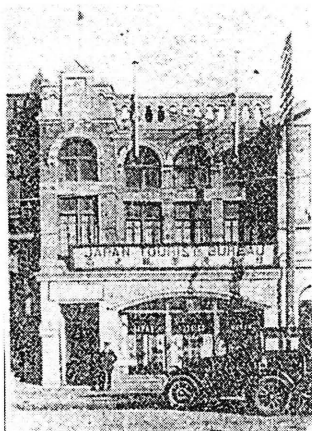
写真③ 北京飯店より
紫禁城望遠



写真④ 王府井大街

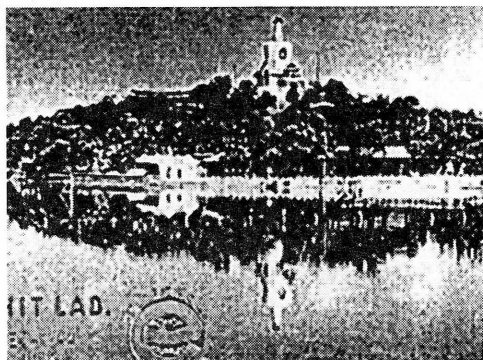


写真⑤ 正陽門



日本國際觀光局
北京案内所
崇文門大街二九
電車東側一三・二二八三

写真⑥



写真⑦ 北海公園



写真⑧

王世金が、全盛の頃にも気に入りの女を置いて楽しんだところであらう。(一章)

ここには西洋的なものを取り入れられて、「中西折衷」した邸の離れを大門の活動の拠点として、小説の舞台が動き出しています。小説の空間描写は明らかに映画のモンタージュの手法を連想させるもので、場面の切り替えが目まぐるしいほど多いのですが、これは北京の空間描写を舞台として設定した上で、そこに、大門につながる人物を配して、物語を紡ぎ出すという書き方です。

主人公の行動空間

つぎには、主人公大門の行動空間について、以下のようにいくつかのコースに整理できます(参照…写真②③④⑤⑥⑦と地図①②)。

a 王邸↓哈達門通り↓ツーリスト・ビューローの支店↓交民巷↓王府井↓東安市場
↓王邸(二章)

b 王邸↓楊の寄宿舎(米国系宗教女学校隣の木造洋館)↓西直門↓万牲(牲)園

(動植物園) ↓ 西太后の別荘の跡 (西洋建築) ↓ 上義師範札拜堂 ↓ 西洋宣教師の墓地
↓ 北京の西郊 ↓ 平則門 ↓ 王府井 ↓ 北京飯店 (四章)

c 王邸 ↓ 正陽門の停車場 ↓ 西直門 ↓ 清華大學 ↓ 青龍橋駅 ↓ 八達嶺長城 ↓ 西直門 ↓ 市
街地の露西亞飯店 ↓ 日本カフェ ↓ 正陽門 ↓ 前門外歡樂街の下級売春窟 (七章)

d 王邸 ↓ 哈達門付近にある加茂の安宿 ↓ 哈達門 ↓ 外城の町外れの貧民窟 ↓ 前門外歡
樂街の下級売春窟 ↓ 芝居小屋 ↓ 前門外歡樂街の小班 (上級売春窟) (九、十章)

e 王邸 ↓ 哈達門通りのツーリスト・ビューロー ↓ 交民巷 ↓ 故宮の宝物殿 (武英殿文
華殿) ↓ 北海 ↓ W教授宅 ↓ 王府井通 ↓ 天安門 ↓ 中山公園 ↓ 王府井通 ↓ 前門外歡樂街の
小班 ↓ 交民巷 ↓ 王邸 (十一章)

このように観光コースをほぼなぞるコースに基づいて構成された各章によって、阿部
知二の観察した北京の都市空間が物語を分節してゆきます。その間の章において、王邸
に戻るコースまたは邸の中を物語の舞台にしながら、都市空間の内部をより細かく表現

することができました。

このように、阿部知二は北京滞在の経験に基づき、北京のさまざまな空間を描こうとしたばかりでなく、そこに集まる人間を観察して、時代に伴う悲劇や喜劇を描くこともしようとしたのです。その空間描写によって、ルポルタージュ的な小説が出来たのです。すなわち、豪邸に住んで、妻妾に囲まれる「買弁」王世金、「奥の房」に住んで親父と違った生活態度を持った王子明、洋風の家を貸家にした王家の空間は、それ自体北京の縮図ともなります。そして、紫禁城、北海公園、万寿山、万里の長城など、景観や歴史や文化をもつ観光名所の空間性は、作品のテーマとなっています。それは美しい北京の空間的記号となっています。また、外国の大使館や駐屯軍、商社の集まる交民巷は、半植民地中国の象徴であります。それから、外国人や上流社会の人々が集まるホテルや歓楽街を通じて、中国をめぐる利権を争う世界中の人々が暗躍している北京の現状も表現されています。さらに、下級の売春窟や場末にある苦力の居住空間を描き出したことによって、人力車夫の代表する民衆の悲惨な世界に注目したことは、阿部知二の中国認識の姿勢を示しているのです。その空間に踏み込むことによって、夏目漱石以来の、中国の下層社会に対する日本の知識人の差別的な眼差しを転換しようとする阿部知二の姿勢までも見る事ができるでしょう。

三 登場人物とモデル

ルポルタージュ

記録文学として書かれた『北京』ですが、その登場人物には殆どモデルがあると考えられます。主人公の大門は阿部知二の分身として読んでもよいでしょう。「阿部知二年譜」(『抒情と行動——昭和の作家 阿部知二——姫路文学館 一九九三年九月)によれば、一九三五年に、阿部知二は三十二歳で、文化学院の講師(一九三一―四〇)をされたわら、明治大学文芸科兼任講師でもありました。小説『北京』は、実際の北京旅行の経験を生かして、書かれたものです。

大門は、日本の中国侵略が刻一刻と迫った一九三五年に、戦時下に置かれる直前の美しい古都―北京を訪れました。北京に滞在中、大門は「北京村の聖者」と笑われて、「北京にある日本人の仲間では、ほとんど除け物になつてくらしてゐた」のです。北京で会う日本人は「役人、軍人、商人、留学生、みな、政治の話から切り出して女の話に入つてゆくか、あるひは、その逆かだ」(二章)のに、大門はそういう話題から自らを遠ざけていたのです。大門は精神的孤独に陥りながらも、北京の美に惹かれて、頽廢の美を求めるようになった若い知識人像として描かれたのです。

大陸浪人の青春像

もう一人の登場人物である加茂も若い日本の知識人像として描かれたのです。そのモデルは、北京滞在中の阿部知二の通訳をつとめたKという日本人青年です。「北京雜記」などのエッセイではKという頭文字を使っています。阿部知二が北京から妻の阿部澄子に宛てた手紙には「片山君」（姫路文学館「阿部知二文庫」〈阿部知二遺族寄贈・寄託資料〉による）と書かれています。エッセイ「北京雜記」（『セルパン』一九三五年十一月）の中に、「K君は満州で通訳をし、匪賊討伐にも従つたが、今北平に勉強にきてゐるといふ若き志士といった青年で、黒々と焼けた精悍な体に藍色の支那服を着てゐる」と書かれています（写真⑧）。小説にはこの北京を案内してくれた「片山君」の言行を生かして書かれたのです。

加茂は大陸浪人風の若者で、中国の歴史と現実について、理論らしいものを持っていますし、「東洋のために、祖国のために」、「この体を祖国と数億の民とに捧げたものとしてゐる」という豪言壯語を口癖にしています。彼の中国の民衆を救う論法は、一つは民衆の中に入って、溶け込んで、「生力を盛り上げる」こと、もう一つは、「力で屈服して置いて、そして、徹底的な善政を施す」というのです。

この右翼とも左翼ともいうようなあやめも分からない青年に対して、その無謀さに

「ドン・キホーテ」を思い起こした大門は「この青年がさつき山の上で、支那の為に流す、といった血が、真赤だといふことだけが事実だとすれば、傍にゐる自分などにとつては、その善意を感じ、その成功を祈つてゐるほかはない」（七章）と半信半疑ながら応援する気持ちを持ちはじめたのです。

しかし、加茂は女遊びもするし、都市の民である人力車夫に暴力を振るうなど、大陸にきた日本人一般と同じ行動をも取っているのです。大門は加茂とともに起こした車夫暴力事件に、罪意識を感じて、自分は「殺人教唆者」だと、「人道主義」を標榜した自分を責める声を心の中に聞いたのです。

この加茂という人物はまさに日本の中国侵略の縮図であります。この人物のように、日本の左翼や右翼が入り乱れ、言論的にも、行動的にも中国侵略へ走り出したことに対して、阿部知二は自己批判も含めて、警鐘を鳴らそうとする意図を持ったのだらうと考えられます。

若き中国人の知識人像

作者が力点を置いて描いたもう一人の人物は王子明であります。先行研究では、この人物のモデルについて問題提起をした論文がありますが、王子明にモデルらしきものは

なく、虚構性の強い人物であるという結論が主流となつていようです。

たとえば、水上勲の「『北京』論」（『阿部知二研究』双文社出版 一九九五年三月）では、「王子明にはモデルらしきものではなく、虚構性の強い人物である」。矢崎彰の「阿部知二と旧都北京——最初の中国体験と長編『北京』をめぐる」（杉野要吉編『淪陷下北京1937—45 交争する中国文学と日本文学』三元社 二〇〇〇年六月）では、「外の登場人物の多くが実在の人物をモデルとしているのに対して、この王子明についてはモデルは明確ではない」というように指摘されています。

加茂とか、鴻妹とかいう人物は、阿部知二が北京で会った人物らしいのですが、王子明のような知識人にも、会ったと考えられます。例えば、周作人の息子が宿泊先まで訪ねてきた記録が「北京雜記」の中にあり、「家に帰ると、周作人氏の令息が来て待つてゐた。北京大学で日本文学を研究しているといふことで久しぶりに文学の話に熱中した。現代文学だけでなく、俳句が研究したいといふことだったが、ほんたうに私達よりも俳句の落ち着きと含蓄がわかるかも知れぬと思わせるほど閑雅で温厚な青年紳士だ」と書かれています。当時、周豊一は二十三歳（一九二二年五月十六日生まれ）で、北京大学で日本文学を研究していたのです。この引用から、小説の第五章に書かれた「もし、日本が、徳川の時代に、清朝と自由に交通してゐたとすれば、いま頃両国はどのようなつゐ

るだらうか」「芭蕉や馬琴や近松が、あるひはこの北京に、あるひは江南に、自由に旅をしてゐたら、どんな文学をつくつてゐたか」という会話は周豊一との間に、交わされたものと想像できます。

また、第十一章では、大門が王子明に誘われて、先輩のW教授に会いに行く場面にも、周豊一が存在が考えられます。というのは、このW教授のモデルは間違いなく周作人（二八八五～一九六六）だからです。その根拠として「隣国の文化——北平の印象から」（一九三五年十月二十六日）に、「ある日周作人氏の談話をきいたが、文学の流行、殊に外国文学の流れの変遷のはげしいのを嘆いてゐられた」という記述が見られます。また、「美しき北平」の中にも周作人にあつて故宮をめぐる話をしたと書かれています。それらの会話は第十一章の中に生かされたと思われまゝ。「日支の比較」をめぐる会話から、当時、北京にいた知日派として周作人はまず連想される人物でした。

「頭を剃つた、仏僧のやうな感じのするそのWといふ王子明の先輩の教授は、樹々の茂つた庭の中に、閑静な書齋をかまへてゐた」（十一章）というように、小説に描かれた人物像も周作人だと連想できます（写真⑨⑩）。

さらに、奥野信太郎の回想録には次のような記述があります。「昨今の北京を訪れる人々は、万寿山や故宮の見物を一通り済ますと必ず周作人へインタビューを求めること



写真⑨ 周作人



写真⑩

が彼等の旅程の一節に繰りいれられてゐるらしい。(中略) どうかやう八道湾の苦茶齋も北京名所の一つとなつたらしい感がある」(『隨筆北京』第一書房 一九四〇年五月)。周作人は自分の八道湾の邸の書齋を「苦茶齋」と名付けて、彼の作品集には『苦茶齋序跋文』(上海天馬書店 一九三四年) などがあります。当時、この家を訪れた日本人が多かつたと思われます。

周作人が日本の知識人の中で相当な人気があつたことは、これらの文章からも分かります。そういう読者にとって、W教授が周作人だという読み方は十分あり得ることでしょう。

水上勲は王子明のことを、小説に登場する日本の知識人に対する「鏡的な人物」と指摘しています(同上)。つまり、王子明は阿部知二が日本の知識人である大門の中国側の相手方となる人物として、大門が中国論や日中関係論を展開する時、それに適切な批判を加える中国の知識人として、構想した人物であります。大門と王子明は中日知識人の象徴的人物として小説に登場し議論を交わします。とすれば、王子明は阿部知二の思つていた若い知識人の代表格でなければなりません。そう考えれば、その造型は周作人の息子である周豊一のみでは力不足です。とすれば、これを補強できるモデルとなつたのは誰でしょうか。そこで、もう一人、考えられる人物は周作人の後輩である林語堂

(写真⑪) です。

林語堂の影

作品の中では、この仮説を裏付けるように、王子明について次のように書かれています。

日本と、英国とに少しづつ留学したことのあるこの王子明との会話は、日本語だつたり、英語だつたり、大門の下手な北京官話だつたりする。そのやうなとき、「故国」を見失ひがちなインテリゲンチア、といふ感慨のさびしさが、ふと影のやうに、二人の間に流れこむこともある。しかし、互の氣持を妨げまいといふやうな礼節から、二人はこの広い邸で、ほとんど顔を合はせることもなく暮してゐた。

(一章)

「互の氣持を妨げまいといふやうな礼節から、二人はこの広い邸で、ほとんど顔を合はせることもなく暮してゐた」という描写から見ても、大門と王子明が顔を合わせる機会はほとんどありませんでしたが、大門が帰国する間近にやや頻繁に会うようになった



写真⑪ 林語堂



写真⑫ 上海時代の魯迅（後列中央）

のです。

王子明という人物は、日本語と英語が両方できて、東洋と西洋の文化に理解を示しています。林語堂は日本に留学した経験こそありませんが、中日比較論を書いたことがありますので、日本について、研究をしたことがあると思われます。『With Love and Irony』(The John Day Company, 1940)に収録された「中国人と日本人」は蘆溝橋事件直後に書かれた随筆だと考えられます。

阿部知二から見れば、林語堂は中国の知識人として代表的な人物です。彼の書いた林語堂論を読めば、林語堂の著作や言論にずっと注目していたことが分かります。

去年の正月、ある人が「知合のアメリカ人が面白い本だといつてゐた」といつて、そのアメリカ人所有の「我国土・我國民」を借りてゐたのを、また借りて読んだのであつたが、そのうち事変が勃発し、やうやく「林語堂」の名は支那を論じるに当たつての重要なもの、一つとなつた。いはゆる知識人はみな、彼の著述を面白くかつ有益だといふのである。

〔林語堂の『支那』〕『東京日日新聞』一九三八年九月二十(二十二日)

阿部知二が真剣に林語堂の中国論を読んだ証拠は、この文章からも窺えます。彼の林語堂との出会いは『我国土・我國民』という本の中でのことです。彼は林語堂の著作を参照しつつ、中国論を展開しようとしたのであります。「支那及び支那人觀の三座標」(『セルパン』一九三八年四月)で述べられた意見は『北京』のテーマと一致すると考えられます。その中に中国や中国人を認識する「基本座標」として、阿部知二は、「例の林語堂の『我国土、我國民』『生命尊重論』等は、この支那的基準学の樹立への大胆な試みとして推賞されなければならず、彼の掲げるいくつかの『支那的基準』は、賛成するにせよ、異を樹てるにせよ、充分研究する必要がある」と推賞しています。そこで言及されたのが、「林語堂などのいふ『夢』なき民族としての支那人論、(彼は「夢」多き民族としては、日本人、獨逸人をあげてゐる)」であります。この議論は林語堂の『The Importance of Living』(『生活の発見』)に見られますが、『北京』の第八章でvisionをめぐる日中比較論として生かされています。

(前略) 王は、やや沈んだ声でつづけた。

「本当のことを、あなただけに云ひますと、僕は、——僕一個としては、それほど、さうした行動への突進を尊重してはゐないのです。逃避するではありません。

僕たちには、ほかに仕事、使命があるとおもふのです。それは何かといへば、幻影ヴァイジヨンを造るといふことです。——言葉がうまく僕の意味を伝えるかどうか危ぶみますが、
——vision——それを理念といつても、抽象的な精神といつても、夢といつても、イデオロジイと今の言葉でいつても、どうしても適切に表現できないのですが、とにかく、そのvisionが、われわれの国民に欠けてゐるのです。これを造ることが、本当に長い目でみるならば、僕たちのすべき仕事だとおもふのです。」（八章）

「（前略）さう考へると、あなたの国民は、visionを持ち、それによつて現実にくことで、西洋人以上だ、といふことも、いはなくても肯定なさるでせう。——しかし、この国には欠けてゐるのです。（後略）」（八章）

引用した文章は王子明が「行動」と「vision」をめぐつて、中国と日本の比較論を展開した一部です。日本人はvisionを持ち、現実的に行動するのに対して、中国人はvisionに欠けて、現実的に行動しないのです。この章の終わりに、中国の知識人として、「科学でも、美でも、進歩でも、民族でもいい、それを愚かなほど頑なに、同国人の頭に植ゑつけ、現実リアリティは現実だ」と決心した王子明に、大門は心を動かされたというように描写

されています。

林語堂（一八九五—一九七六）は、一九二三年、アメリカやドイツに留学して帰国した後、北京大学の英文学と言語学の教授をして、一九二六年まで、北京に住んでいました。一九二四年九月に、魯迅や周作人たちの同人雑誌『語糸』の同人になり、周作人の後輩に当たります。一九二七年十月、林語堂は上海に移住して、国立中央研究院外国語編集主任になり、英語で書かれた「北京を語る」というエッセイは『中央副刊』（第六十五号 五月二十八日）に掲載されました。一九三五年九月に、四十一歳の林語堂が英語で書いた『我国土・我國民』（My Country and My People: New York: Reynal & Hitchcock）は、『大地』でノーベル文学賞を取ったパール・バック（Pearl S. Buck）の協力を得て、アメリカで出版され、たちまち、欧米でベストセラーになりました。その後、一九三七年十一月、英語で書かれた『生活の発見』（The Importance of Living）もアメリカでベストセラーとなりました。

阿部知二は北京旅行の直後から、林語堂に注目するようになったと考えられます。二人が会ったかどうか定かではありませんが、阿部知二にとって、中国研究の座標を提供してくれる友人のような人物だったことでしょう。後に、一九四四年九月から一九四五年四月まで、阿部知二は林語堂が勉強した聖約翰（セント・ジョンズ）大学の講師を勤

めます。蘆溝橋事件後、その前年、アメリカに移住した林語堂は雑誌『Time』に「日本は中国を征服できぬ」（一九三七年八月二十九日）を掲載したり、『我国土・我国民』の十三版にあわせて第十章の「新中国の誕生」を書き加えて、抗日戦争による新中国の誕生を予言したりして、抗日的な言論を次々と発表していました。『改造』の「支那事変特輯号」（一九三七年十一月）には、林語堂の「古都北平」と阿部知二の「王家の鏡」とが同時に掲載されています。訳文の後ろには、訳者のつぎのような注記が記されています。

訳者。此文は林語堂氏が極最近「紐育タイムズ」紙上に発表せる隨筆である。氏は目下上海を去つて、紐育に在住してゐるやうである。

もともと「二都物語」というタイトルで「ニューヨークタイムズ」に発表された林語堂の「古都北平」の翻訳者は署名されていませんが、阿部知二ではないかと推測できます。この故郷喪失の心情を表した隨筆に描かれた「古都北平」には、阿部知二の『北京』と相通じる部分が多いのです。もちろん、『北京』に展開された王子明の中日文化論は林語堂の言論そのものではありませんが、阿部知二が林語堂の著作から得たヒントと、

自分の中国觀察を総合して、作品に織り込んだものだと言えます。林語堂の説を下敷きにした痕跡が、作中には多く見うけられます。

中国經綸論の分析

ここで、王子明という人物の見解を林語堂の議論に照らしあわせて、検討してみたいと思います。『北京』の中では、中国論や日中關係論が大門と王子明の間に展開されています。北京飯店屋上のサロンに集まった日本人の沼や香住との会話を背景に、大門が中国の同化力という話題を提供して、「いまでも中国にはその力がありそうだ」と話したことに對して、王子明は反対の意見を述べました。

「僕はさつきからその話をきいてゐたのですが、たとへさういふ同化力といふものが、中国人にあるとしても、僕たちはもはやそんなものを有難いとは思はないのです。なるほど、今迄は、そのやうな力で、何度も生き返つて来たかも知れないが、もはや、そんなことを繰返したくないのです。いろいろのものを、呑み込むたびに、中から腐つてゆくからです。一度砂漠のやうに、——ちやうど魯迅の言葉をここで思ひ出すわけですが、——乾いてしまつた方がいいのです。その後、全く新らし

い何物かで、生き返りたいのです。それが、いかにして可能か、といふことは、今いへないのですが。」（五章）

この議論からは、中国の若い知識人が歴史の重みを捨てて国を改造しようとする、苦悩と意欲とが感じられるのです。また、王は中国の知識人は古来抵抗の伝統を持つことに言及して、現代知識人の抵抗を「運命」として、受け止めています。

しかし、王はまた中国の同化力に変えられなかった日本の頑強な力にも関心を示したのです。

「中国は、昔はユダヤ人さへ呑み込みましたからね、——しかし、隣りの日本人だけは、いつまでたつても、決してわれわれの色に染めることは出来ません。——隣り合はせに、こんな極端な二民族、——あなたのいふ消化力無比な僕たちと、僕を見る頑強無比なあなた方が、並んで住んでゐるといふ宿命には、到底、マルキシズム以上の興味があります。」（五章）

同化力から二つの民族がどのようにつき合うかという問題まで議論は発展しました

が、大門は「世界平和は、夢のごときものだ」し、「集団と集団の闘ふことが事実」だと認めながら、「人と人とは、みんな親しみ合はうとする心を持つてゐることも事実だ」と強調しました。それに対して、王子明はニーチェの言葉で返答をしました。

「——《友となりたければ、まづ彼に向つて戦いを挑め》——《抵抗、それは奴隷の道徳だ》と、ツアラトウストラがいつてゐます。」（五章）

大門は王子明の身の上に中国知識人の「閑雅で、柔和な」裏に強い意志を発見しました。時局の変化に伴つて、「親日か抗日か」に入らない中間派の王子明も、行動を持つて抗日運動に参加するようになったことは、小説の後半に描かれた大門と王子明の知識人の「行動」をめぐる議論によつて暗示されています。

大門が仲秋名月の中山公園で、王子明の顔に「慍おこつてゐる」表情を発見してびっくりした場面には、リアリティがあります。それは中国に後ろめたさを持った当時の日本知識人が感じる中国知識人の表情でしょう。

「北京人は、——おそらく支那人は、みな慍おこつた顔だ」（十一章）という大門の感覚は日本の中国侵略に対する中国人の抵抗が現実には起きているという認識を言外に示したも

のです。小説では大門の「温情主義」など幻想に過ぎないということを、王子明という鏡を通して読者に納得させ、その反省を促す狙いがあつたのでしょうか。

このように小説に書かれた王子明の議論は、林語堂の『我国土・我國民』につき合わせて読めば、はつきりと林語堂の著作を出典としてゐるものと分かります。例えば、中国人の同化力に関する議論は、『我国土・我國民』の第一章「中国人」に基づいて構想されたものと考えられます。とくに、「ユダヤ人さへのみこみました」という例は、次のような記述に見られます。

豚肉を食はないといふ猶太人の習慣は、單なる思ひ出に過ぎないやうになつたほど、今日徹頭徹尾支那化した河南の猶太人を支那人化したのは全く中国の家族制度の賜である。

（『我国土・我國民』新居格訳 豊文書院 一九三八年七月 五二ページ）

また、作品に書かれた「大学教授と学生との反抗的運動」（五章）は『我国土・我國民』の第一章にも書かれています。

阿部知二は中国の知識人の抵抗運動の必然性を、その歴史のうちに立証しようとした

のでありますが、「今日の抗日支那の淵源を」見つけたのは林語堂の著作においてでした。そこで、彼は林語堂論の中でも林語堂の中国抵抗論を強調したのだと思われます。

そこで、それでは林語堂は、全世界に向かって、嘯まぬ犬としての支那を紹介してゐるか、といふと、さうではない。われわれは、そのやうに呑気になつてゐられぬ。日本に対する時、彼は、俄然、嘯む犬の支那を振り向ける。——それを知るには、「支那における出版と与論の歴史」（一九三六、上海）といふ一書を読めばよい。実は、「我が国土」「生活の発見」よりも、この本について紹介したかつたのだ。余白はないが、これは、他の二書に書かれざる支那を書いてゐる。これは、「支那インテリ史」でもあり、「支那反抗思想史」でもあり、紛れもなく、今日の抗日支那の淵源を知るべき書である。その結論は日本への攻撃であり、ここには彼は、嘯む犬を出してゐる。

〔林語堂の『支那』〕『東京日日新聞』一九三八年九月二十二日

阿部知二が特に注目した『支那における出版と与論の歴史』という本は、英語で書かれたもので、一九三六年上海の別発洋行から発売され、アメリカのThe University of

Chicago Pressから出版されたのです。英語名は『A History of the Press and Public Opinion China』です。この文章を読めば、阿部知二が林語堂の中国論をちゃんと研究したうえ、その林語堂の議論を『北京』の登場人物である王子明に語らせて、中国理解の必要性を訴えようとしたことが読み取れます。阿部知二が林語堂を王子明のモデルとして構想し、『北京』に書き込んだことはつきりと断言できます。ちなみに、晩年の林語堂も英語で北京の文化や歴史を記述した『帝都北京』(Imperial Peking: Seven Centuries of China) (Crown Publishers 1961) を執筆して、北京の魅力を読者に訴えようとしたのです。

四 阿部知二の「北京案内」

一九〇〇年の「義和団事件」(北清事変) から、日露戦争後の満州占領、満州事変などの歴史的事件への関心は、新聞や雑誌などの近代的メディアによって、日本人の読者に広まってゆきました。また、大正トゥーリズムの流行に伴って、「古都北京」は日本人にとって、憧れの東洋の都となってゆきます。前にも触れた北京旅行記に加えて、観光案内の出版も増えるようになりました。筆者が調べた限りでは、一九二〇年代から、

日本や中国で数多くの北京案内が出版されたことは明らかであります。例えば、次のような北京案内が挙げられます。

- 『北京名所案内』 脇川壽泉編纂 改版増補第五版 北京 壽泉堂 一九二一年三月
『天津・北京案内』 上野大忠編 『天津』 日華公論社 一九二二年
『北京』 丸山昏迷著 増訂第三版 北京 丸山幸一郎 一九二三年十月
『北京・名勝と風俗』 村上知行著 北京 東亞公司 一九三四年九月
『北京遊覽案内』 石橋丑雄著 東京 ジャパン・ツーリスト・ビューロー 一九三六年

特に、蘆溝橋事件前後、北京は世界から注目を集める、時事問題の焦点となったのです。蘆溝橋事件に至る段階で日本軍と中国軍の衝突による「北支事件」、「冀東自治政府」、「塘沽協定」など、中日間の摩擦が頻繁に発生していました。蘆溝橋事件後、日本は不告宣戦して、中国に対する全面戦争に突入したのであります。

蘆溝橋事件後、新聞では連日日本軍の中国戦線への展開が報道され、『中央公論』や『改造』等の有力雑誌も特集を組んで、従軍記者の報道や戦争をめぐる議論を掲載しています。戦争報道と同時に、北京に関する觀察記や紀行などの文章が目立つようになりました。たとえば、

村松梢風「北京城雜記」(『中央公論』「支那問題特集」一九三七年九月)

尾崎士郎「悲風千里」(『中央公論』「擴大事變特別編輯」一九三七年十月特大号)

原勝「北平籠城手記」(『改造』「日支事變特輯」一九三七年九月)

山本実彦「北平・通州・青島」(『改造』「日支事變特輯」一九三七年十月増大号)

中野江漢「北平以北」(『改造』「日支事變増刊号」一九三七年十月)

林芙美子「北支那の憶ひ出」(同右)

阿部知二「王家の鏡」(同右)

橋川時雄「北京文化の再建設」(『改造』「上海戦勝記念」一九三七年十一月)

杉山平助「北京より」(『改造』「新年号」一九三八年一月)

その他、夥しい「北支」に関する言説がメディアに満ちてきます。北京は「事変」の中心にあったからこそ、いろんな角度から言及されていたのです。

北京はどういう町であるか、北京をどう見るべきか、ひいては、中国をどう見るべきか、中国人をどう見るべきか……などは、当時の読者がとりわけ注目した問題です。『北京』はそのような言説の空間に答えるべく、阿部知二が自らの知性と良識をもって、読者の期待に沿うべく、執筆した長編小説だと思っています。

実際に、阿部知二の書いた『北京』を読んで、北京の町に憧れる人々もいたのです。

林芙美子は「北支那の憶ひ出」の中に、その気持ちを記しています。

私は阿部知二氏の書かれた燕京と云ふ小説を読んで、半晴半曇の北京の街にあらがれ、北京の風物に就いては何の知識もなくふらふらと出かけて行つたのです。

前述のとおり、「燕京」は一九三七年一月改造社の文芸雑誌『文芸』に掲載された中編小説です。『北京』はそれを吸収して約三倍に書き改められて出来た長編小説です。

「文芸時評」を書いた飯島正も「特に、僕は、最近北京に行き、且その印象を『東洋の旗』の一書として上梓しただけに、事変前の北京をこの作者の筆に依つてうかがひ見ることは、その比較の意味からのみ云つても、まことに面白い」（『新潮』一九三八年七月）と述べているように、事変前後の北京の街を比較的に読むことによって、阿部知二の描いた北京を通していわば言語都市的にその街への幻想を呼び起こされて、おもしろさを感じたのです。

蘆溝橋事件後、日本人は大挙して北京に押し寄せ始めます。当時の「北京案内」をみれば、「殖える！殖える！邦人一万二千余名 四月一日平均百名の増加」というキャッチ・フレーズが、観光地図にこれ見よがしに印刷されています。

北京は元來商業地で無い關係上、邦人の發展は極めて遅々たる觀があつたが、近來數年間の支那政情の不安定、特に南京、濟南事件以後、急に避難引揚者を續出し、又首都南遷後に於ける邦人經營の商社の縮小に因り、逐次在留の減少を來たし、昭和元年末の現在邦人一六一六人を最頂點として、一時殆ど半数に減じたことすらあつたほどである。昭和八年五月の日支停戰協定後、北支政情の安定と共に、漸次その増加を見るに至つたのである。

春と共に北支の新天地を目指し滿州、内地から押し寄せた邦人は夥しい數を示し、四月中に北京へ來住せる邦人のみにても内地人二千七九人、朝鮮人九百十一人、台灣人八名と二千九百九十八名に達し、實に一日約百人の増加振りで三月の増加率（二日六十名）を悠々と破り北京在住邦人總人口は遂に一万人を突破に至つた。

（「北京遊樂觀光市街展圖」北京・大亜印書局 一九三九年十二月）

そのような時期に、北京に関する情報、とりわけ、街なみ案内や滞在者の報告が、広く、求められるようになったのです。『最新ポケット北支那便覧』（資料年報編輯局 泰山房 一九三八年五月）のような中国情勢案内も出版されています。そうした中、小説の『北京』の持つた影響力も無視できないものでした。

『北京』はある種の観光小説とも云えます。読者は、当時の観光案内に挙げられた観光名勝を、主人公の大門の眼を通して見ることが出来ます。また、語り手によって、物語の中に織り込まれている北京の都市空間を案内される気分にもなります。と同時に、『北京』はまた、中国認識や中国人とのつきあい方を提示したものでもあります。結局、読者は、日本人の反省を促すべく作者が織り込んだメッセージを読み取れることにもなったでしょう。

『北京』が刊行された時期に、阿部知二はそのかたわらで、前述の「支那及び支那人観の三座標」（『セルパン』一九三八年四月）を発表して、中国理解の必要性を呼びかける一方、「為政者指導者の支那、庶民の支那、知識階級の支那」という中国認識の三座標を提起したのです。そして、「基準座標の混乱を克服し、実証に加ふるに理論を得たときにのみ、支那は『謎』でなくなるだらう」と指摘したのです。このようなメッセージを『北京』を通じて意図的に送ろうとしたのでしょう。

五 抒情文学としての『北京』

美しき北京

——それから、汽車が漆黒な闇の中を走つて北京に彼を運び、自動車が真夜中の暗い街を王邸に運び、一夜が明けたときの、鮮かな印象。何といふ明るい、澄明な春であつたらうか。窓のそとの紫丁香の白紫の花むらのがやき、楊柳や槐樹の濃やかな緑のうへにひろがる真蒼な空。大門は、とるものもとあへず、案内者を頼んで街に出た。のびやかな、広い街。紫禁城の、黄金色と碧瑠璃と朱と紫の薨や壁は、燦然として、空に涯しもなくひろがつて光つてゐた。北海公園の白塔のうへから、この樹々と水と宮殿とに溢れた、大平原の中の壮麗な大都を眺めまわしたよろこび。——たしかに、北京は美しい都であつた。(二章)

この北支の世界に、何事があるのであらうとも、僕としてはただかうした美しいなごやかな光だけを心に残してこの北平を去つてゆきたいのだが、それは僕といふ人間の利己主義といふものであらうか、と王子明にささやかうとしたけれども、それをいふのも心憂いほど、この室々のなかは、のびやかな美の世界だつた。(十一章)

同時代の評論家も「現在の阿部氏に近い映像が最も正直に、最も素直な美しさで、描かれている」（安藤一郎「阿部知二論」『三田文学』一九三八年九月）と評価したように、小説では大門の五感を通じて、その印象に即して、抒情的な筆致で北京の美が描き出されました。

大門にとって北京滞在は、美の世界を泳いでいるかのようです。しかし、まもなく、この北京の美しさを曇らせる暗雲が近くに靡いてきたという予感を持ったにせよ、大門にはそれに抗する何の術もありません。『北京』の抒情性はこの近未来に対する閉塞感と感傷を持った大門の美の観照によって表されたのです。

このように「美しい」北京を描くことが出来たのは何故でしょうか。まず、考えられるのは阿部知二が北京の魅力に見とれ、北京への愛着の気持を持ったことであり、その次は、やはり文学の方法論に長じる作者の文体の力です。野間宏はその文体の特徴を次のようにまとめ上げています。

小説作品の構造にたいする特別な関心、小説の叙述の文章のなかに新しい知的思考を挿入し、感覚の比較考察を行い、一つの事態を描く時、それについて、必ず正、負のまったく逆の解釈が可能であることを示すのである。そしてこれらの作業の綜

合を求めるところに、その独自の文体が成立する。

〔冬の宿〕の解説 『阿部知二全集』第二巻 一九七四年六月

『北京』の「跋」では「この小説は時局的な文章ではない」と繰り返して断りました。が、「事変」後、現実には減じていく古都北京の美しさをいとおしみつつ表現したことは、著者の「時局」への関心の有様を示しているものでしょう。「占領」または戦火にさらされる北京への哀惜は小説の文章に滲んでいます。戦争が美を減ぼすものだとは批判する意図を読者は読み取れるのでしょうか。

「去日の美女」Ⅱ北京

『北京』は阿部知二の北京という街に感情移入しながら描いた作品です。この「美しい北京」を阿部知二は「美女」というイメージで文学的に捕まえています。彼の自作案内である「跋」では、「晩夏初秋の澄明な大気のなかにかがやいてゐる北京に、私はいはば一眼の恋におちたやうなものだつた。この年関けた美女にこころ惹かれた私は、判断心も忘れてしまつて愛着したのであるかも知れなかつたが、それもよろしい、と今でもおもつてゐる」と自分の北京への愛を吐露しています。彼は北京を訪ねてから、その

美しさに魅了され、北京を「美女」に喩える表現がその作品にしばしば現れるようになります。エッセイ「美しき北平」（同前）では「あの土地は美しい女が多く、ものに争われるやうに、美しいが為に昔から民族に争われてきたといふ宿命を持つてゐるのであらう」と感嘆したり、「支那の眼鏡」（同前）では「街を女に喩へるならば、私は一眼で、蒼白く老いかけた彼女に惚れたのである」と感想を語ったりしました。この気持ちがつと沈殿して、詩情の溢れる小説を作り上げることとなつたのです。

『北京』の中に現れる「美女」のイメージが多く、それを列挙してみましよう。

第一章 大門と王子明の対話

僕は、こんな美しい、静かな旧都の空気を、四ヶ月も吸つただけで、一生の想ひ出をしたとおもつてゐますよ。

いいえ、もはや死んでしまつた女の、何の役にも立たぬ美しさを褒めていただくだけでも、いやな土地だといはれるよりはうれしく感じます。

第二章 大門は万寿山で幻の美女と巡り会う

水色の羅衣をまとつた、しなやかな若い女の半身と、黒衣の老婆のずんぐりとした半身とが見えた。（中略）すばやく顔を蔽つて隠れてしまつたその娘が、すごい

ほど美しかったやうな氣もするし、また有りふれた醜い田舎娘であつたやうな氣もする。ただ、妖しく心を惹かれながら、彼の身は、雨滴の散りかかる祠の中にあるへてゐた。

第五章 北京飯店でみた中国女性…

真紅な羅衣の裾から、織い脚をのぞかせた美しい支那の女が、白麻の服の支那の青年と、英語で囁きながら踊つてゐる。

この屋上のあらゆる人種の女のなかでも、一番美しいとさつきから感じてゐた、紫衣の支那服の少女と、王子明はゆるやかに円舞曲ををどつてゐた。

それらの美しい女はすべて、大門にとって、ただ眺めやる存在で、近づいても逃げ去つてしまふ幻の美女です。それに対して、大門が自らに近寄せたのは「小班」の妓女である鴻妹でした。この美しい妓女とは身体的にふれあうことができたが、それは一種の「頹廢」な美だと大門は感じています。

その「鴻妹」についての描写に注意してみましょう。鴻妹は小説中に、二回登場しますが、一度目には、水色の服、二度目には紅色の服とその装いが書き分けられています。そこに作者の思いが込められていたはずですが、

そのやや角張つた顔全体の表情は、何千年の洗練をもつてゐるのだといふやうに、優美さと艶しさに調和されてゐる。長い円頸は高い領子に締めつけられ、肩の下の胸は張り、ながい胴の下腰はまつたく纖くくびれて、水色の薄衣の下にくねつてゐた。投げ出した脚は細く円い。(十章)

真紅な服をきた鴻妹が入つてきたが、仲間の妓たちに会釈するのでもなく、王子明に媚びるのでもなく、はずむやうな小足で室の中を二三度あちこち歩きながら煙草をすつてゐたが、ものもいはずに、やはり昨夜のやうな冷やかな笑を漂はせながら、すつと大門の坐つてゐる長椅子のとなりになきて掛けると、真紅の衣の腰に白々と揺れてゐた花紐を邪慳に外して、彼の襟に挿しながら、「白蘭花と茉莉花。」といった。(十一章)

「水色の薄衣」と「真紅な服」の対比がはつきり現れています。このような描写を読めば、「鴻妹」は北京という街のイメージをしながら、それを凝縮するようにして描かれた美女であると言えます。と申しますのも、初秋の北京の街では、青い空と水色の湖と紅い紫禁城の城壁が人々の視覚に映えるからです。阿部知二が感覚的にそれらの色彩

のイメージを捉えたのも当然でしょう。水色は「万寿山」の湖、「南海」から「北海」などの水面や秋の空を表すのに対して、紅い色は樓閣の紅い壁を表現したのでしょう。ややおくれて日本占領下の北京を描いた梅原龍三郎の絵画（一九三九年～一九四三年）をみれば、そこにもこの二つの色彩が鮮やかに画面に現れています。北京に対する、日本の芸術家の色彩感覚が一致したことは興味深いことです。

こうしてみると、『北京』は阿部知二の北京への思いを妓女「鴻妹」に重ねて描き出した抒情的な作品であると評価できます。しかし、それだけではありません。

象徴としての恋物語

大門と妓女鴻妹との出会いはこの小説のクライマックスです。小説は感傷性溢れる恋物語（但し成就しないこともはじめからわかっている）の構成を持つようになり、読者を引きつける新たな展開の力が感じられます。

文学仲間の三上秀吉の阿部知二宛の手紙は、阿部知二の描いた鴻妹像の生き生きとした様をつぎのように評価しています。

今度の作品は北京といふ劇詩を土地と人物とにふくらませて行って特異な美しい

作品になつてゐると思ひました 殊に鴻妹をあまり活躍させないで非常によく描いてゐると思ひました これはこれまであなたのお書きになつた女性の中で最も好きな人物でした そして印象深くはつきり感じられます それは美しい女といふだけでなく、鴻妹のことは少ししか書かれないけれど、その少しのことがとてもこまかくて、挙動や氣質が生々と目に見えました（中略）近頃読んだ后でこんなにきよらかにされたものはありませんでした（昭和十三年五月三日）

（『抒情と行動——昭和の作家 阿部知二 姫路文学館 一九九三年九月』）

鴻妹は高慢な妓女ですが、大門にとって、「この女の高慢さ全体がいひやうのない無邪気なものやうに感じられたり、あどけなさそのものが、ある險しさを含んでいるやうにみえたりする」のです。

大門は鴻妹に「愛情のしるし」の花をもらい、身体的に接近できて、「やつぱり自然と茶番じみ度くなるやうな衝動をおこす」「支那の力」を感じたり、「一人の女によつてかきおこされた情感が、彼の中をいまも駆けめぐつてをり、もはやいつまでも抜けることがないとおもはれる」ようになったのです。しかし、「鴻妹」は華北の「政局の有力者」にも、「大尽遊びの日本人」にも、華北自治の工作に携わる日本人にも取り囲まれ

ています。大門はその魅力に惚れるものの、「横暴な征服者のやうにこの女に對しよう」とはしないし、またそうすることもできないのです。このまま、北京に残ることは無意味だと自覺しつつ、名残を惜しみながらも、主人公は北京を去るのです。

北京を離れたその大門に「鴻妹女士は、数日前に、この北平より姿を消したといふことです」という沼の知らせが届きます。それは「華北事變」直後のでした。大門の感傷はつぎのように叙されています。

西方の空には、真紅な雲片が一つ横にたなびいてゐた。その雲の輝きのなかに、紅衣の腰に香り高い白い花をつけたひとりの女の像を結ばうとしてみたができなかった。その雲の下の街はまったく遠く遙かであつて、そこでは人も事件も自分とはかかはりなく動いてゐるものとおもはれた。（十三章）

こうして、紅衣の女も北京の街も幻影として、主人公の記憶に残るしかなかったのです。このもとより成就することを許されぬ、淡い恋物語は、阿部知二の北京に對する思ひの象徴でもあります。日本軍に蹂躪されつつある美しい北京に對して、阿部知二は知識人の無力感を感じたのです。彼は、自分の求める「東洋の故郷」が、ほかならぬ自分

を含めた日本人によって滅ぼされるのではないか……という危惧を抱えながら、精神的な「恋人」と別れを告げる感傷の紀行を綴って、読者に訴えかけることしかできなかったのです。

おわりに

以上、分析してきたように、『北京』において、阿部知二は北京という都市の空間と時間を物語にしようとしたのです。その都市の物語に、旅の経験を記録するという形を取りながら、書き手は一九三五年という特定な時間を枠組みに、北京の都市空間、その空間の中で動いていた人物の関係、また、そこで起きた歴史的な事件を、編み物のように編みこんでいったのであります。

『北京』は特殊な時期における北京案内として書かれた作品です。というのも、そこには北京の持つ空間性が、景観的な空間、歴史的な空間、政治的な空間、都市住民の階級による空間など、さまざまな側面にわたって、描き出されたのみならず、そこにはまた、滅びゆく美の発見と美を滅ぼす力に対する無力感をも読み取ることができます。また、作者は小説の時局性を否認しながらも、時局への観察が作品の隅々に織り込まれて

います。読者を北京の持つ東洋的空間美へ誘い込むように、描かれたこの小説では、阿部知二の中国認識も知的に描き出されました。作者は日本の中国に対する侵略戦争の現状と未来に危惧を示しながら、より知的な中国認識の必要性も訴えたのであります。

とともに、美しい北京の魅力に魅せられた主人公の北京に対する哀惜の感情を、ある美女とのほかない恋愛にだぶらせて描きあげた『北京』は、とりわけその抒情文学の側面によって、読者を引きつけたものと思われまゝ。阿部知二は抒情的な文体を用いて読者を感動させる才にもたけた作家としての資質をここに示しています。

また、下級娼婦や人力車夫を描くところでは、夏目漱石以来、日本の知識人が持つてきた否応なき中国貧民層蔑視の視点を打破しようとする作者の意図が見られますが、結局、阿部の描く主人公は無力感や自己嫌悪に陥って、解決策を見つけることが出来ません。『北京』では、中日間の問題の扱いも含めて、主人公の視点があくまでも、一観光客の「感傷旅行記」に止まっていることは否めず、それ以上に踏み込んで中国の「内部」を描くことはできなかったのです。それは時局に配慮するほかなかった、当時の日本知識人の置かれた限界をあぶりだすことでもありました。

付記…本論は日文研フォーラムでの講演内容に加筆したものです。講演後、コメンテーターや質問者の方々から有益な助言をして頂いたことに、感謝します。

発表を終えて

この度、日文研フォーラムにおいて、この数年間、私が取り組んできた阿部知二の『北京』論をみなさんと分かち合うことが出来まして、感謝の気持ちで一杯です。

まず、雨の中を大勢の聴衆の方々に来て頂いて、いろいろと質問を頂戴しまして、問題をさらに深めるヒントを与えて戴きましたことに感謝したいと思います。

当初、コメンテーターをお引き受けくださっていた鈴木貞美教授が急用で出席できなくなりましたところ、稲賀繁美助教授が代理を引き受けてくださって、ユニークな視点を用いて、巧みな語り口で、コメントを加え、講演を成功に導いて下さいました。実は、稲賀先生が私に、今回の講演のテーマを選ぶきっかけを作ってくれたのです。さらに、今年の夏、日文研の軽井沢でのシンポジウムに参加した際、阿部知二のご長男のフランス文学者である阿部良雄氏ご夫妻に引き合わせて下さいました。その阿部良雄氏との会見は、私の今後の阿部知二研究の励みにもなります。今回の発表のあと、阿部良雄氏のご好意で、来る十一月二十九日、姫路文学館で阿部知二研究会・秋期大会で、もう一度講演することになりました。人と人の出会いこそ文化交流です。交流を通じて、相互理解を深め、友情を結ぶ機会を得たのは大きな喜びです。

また、講演の前、助言して下さいました恩師の藤井淑楨先生にも、講演の後、研究のアドバイスをして下さいました劉建輝助教授にも、感謝の意を表したいと思います。お二人の助言やアドバイスで指摘された問題に示唆を得ながら、さらに、研究を深化するよう、頑張っていきたいと思っています。

最後に、司会をして下さったアレキサンダー・ベネット助手や、当日の会場のご手配を給わった職員の皆様にも感謝の意を表したいと思います。

2003年11月26日

王成

日文研フォーラム開催一覧

回	年 月 日	発 表 者・テ ー マ
1	62.10.12 (1987)	Alessandro VALOTA (ピサ大学助教授) 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11	Engelbert JORIβEN (日文研客員助教授) 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	Lee A. THOMPSON (大阪大学助手) 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19	Fosco MARAINI (日文研客員教授) 「庭園に見る東西文明のちがひ」
⑤	63. 6.14	SONG Whi Chil 宋 曩七 (慶北大学校師範大学副教授) 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9	Sepp LINHART (ウィーン大学教授) 「近世後期日本の遊び—拳を中心に—」
⑦	63.10.11	Susan J. NAPIER (テキサス大学助教授) 「近代日本小説における女性像—現実と幻想」
⑧	63.12.13	James C. DOBBINS (オベリン大学助教授) 「仏教に生きた中世の女性—恵信尼の書簡」
⑨	元. 2.14 (1989)	YAN An Sheng 嚴 安生 (北京外国語学院日本語学部助教授) 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元. 4.11	LIU Jingwen 劉 敬文 (遼寧大学日本研究所副所長) 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9	Suzanne GAY (オベリン大学助教授) 「中世京都における土倉酒屋—都市社会の自由とその限界—」
⑫	元. 6.13	HSIA Gang 夏 剛 (京都工芸繊維大学助教授) 「インタビュー・ノンフィクションの可能性—猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛かりに—」

⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコバント Ernst LOKOWANDT (東洋大学助教授) 「国家神道を考える」
⑭	元. 8. 8	キム・レーホ KIM Rekho (ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授) 「近代日本文学研究の問題点」
⑮	元. 9.12	ハルトムート O. ローターモンド Hartmut O. ROTERMUND (フランス国立高等研究院教授) 「江戸末期における疫病神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3	WANG Xiang-rong 汪 向榮 (中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授) 「弥生時期日本に來た中国人」
⑰	元.11.14	ジェフリー・ブロードベント Jeffrey BROADBENT (ミネソタ大学助教授) 「地域開発政策決定過程を通して見た日米社会構造の比較」
⑱	元.12.12	エリック・セズレ Eric SEIZELET (フランス国立科学研究所助教授) 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
⑲	2. 1. 9 (1990)	スミエ・ジョーンズ Sumie JONES (インディアナ大学準教授) 「レトリックとしての江戸」
⑳	2. 2.13	カール・ベッカー Carl BECKER (筑波大学哲学思想学系外国人教師) 「往生—日本の来生観と尊厳死の倫理」
㉑	2. 4.10	グラント K. グッドマン Grant K. GOODMAN (カンザス大学教授・日文研客員教授) 「忘れられた兵士—戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2. 5. 8	イアン・ヒデオ・リービ Ian Hideo LEVY (スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授) 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2. 6.12	リヴイア・モネ Livia MONNET (ミネソタ州立大学助教授) 「村上春樹：神話の解体」
㉒	2. 7.10	LI Guodong 李 国棟 (北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師) 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇—文化伝統からの一考察—」
㉓	2. 9.11	MA Xing-guo 馬 興国 (遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授) 「正月の風俗—中国と日本」
㉔	2.10. 9	ケネス・クラフト Kenneth KRAFT (リーハイ大学助教授) 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ Ahmed M. FATTHY (カイロ大学講師) 「義経文学とエジプトのペーパルス王伝説における主従関係の比較」
28	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ Karel FIALA (カレル大学日本学科長・日文研客員助教授) 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
29	3. 2.12	アレクサンドル A. ドーリン Aleksandr A. DOLIN (ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員) 「ソビエットの日本文学翻訳事情—古典から近代まで—」
30	3. 3. 5	ウイーベ P. カウテルト Wybe P. KUITERT (ワーゲニンゲン大学研究員) 「パロック・ヨーロッパの日本庭園情報—ゲオルグ・マイステルの旅—」
31	3. 4. 9	ミコワイ・メラノビッチ Mikołaj MELANOWICZ (ワルシャワ大学教授・日文研客員教授) 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14	ベアトリス M. ボダルト・ベイリー Beatrice M. BODART-BAILEY (オーストラリア国立大学リサーチフェロー・日文研客員助教授) 「三百年前の京都—ケンベルの上洛記録」
33	3. 6.11	サトヤ B. ワルマ Satya B. VERMA (ジャワハルラー・ネール大学教授・日文研客員教授) 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9	ユルゲン・ベルント Jürgen BERNDT (フンボルト大学教授・日文研客員教授) 「ドイツ統合とベルリンにおける森鷗外記念館」
35	3. 9.10	ドナルド M. シーキンス Donald M. SEEKINS (琉球大学助教授)・ 「忘れられたアジアの片隅—50年間の日本とビルマの関係」
36	3.10. 8	WANG Xiao Ping 王 曉平 (天津師範大学助教授・日文研客員助教授) 「中国詩歌における日本人のイメージ」
37	3.11.12	SHIN Yong-tae 辛 容泰 (東国大学校文科大学教授・日文研来訪研究員) 「日本語の起源 —日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る—」

③⑧	3.12.10 (1991)	HONG YoonSik 洪 潤植 (東国大学校教授) 「古代日本佛教における韓国佛教の役割」
③⑨	4. 1.14 (1992)	サヴィトリ・ヴィシシュワナタン Savitri VISHWANATHAN (デリー大学教授・日文研客員教授) 「インドは日本から遠い国か?—第二次大戦後の 国際情勢と日本のインド観の変遷—」
40	4. 3.10	ジャン＝ジャック・オリガス Jean-Jacques ORIGAS (フランス国立東洋言語文化研究所教授) 「正岡子規と明治の随筆」
④①	4. 4.14	リブシェ・ボハフモコヴァ Libuše BOHÁČKOVÁ (プラハ国立博物館日本美術元キュレーター・日文研客員教授) 「チェコスロバキアにおける日本美術」
42	4. 5.12	ポール・マッカーシー Paul McCARTHY (駿河台大学教授) 「谷崎文学の『読み』と翻訳：アメリカにおける 最近の傾向」
43	4. 6. 9	G. Cameron HURST III G. Cameron HURST III (ニューヨーク市立大学リーマン広島 校学長・カンザス大学東アジア研究所長) 「兵法から武芸へ—徳川時代における武芸の発達—」
44	4. 7.14	Yoshio SUGIMOTO 杉本 良夫 (ラトロープ大学教授) 「オーストラリアから見た日本社会」
④⑤	4. 9. 8	WANG Yong 王 勇 (杭州大学日本文化研究センター教授・日文研客員助教授) 「中国における聖徳太子」
④⑥	4.10.13	LEE Young Gu 李 榮九 (大韓民国中央大学教授・日文研客員教授) 「直観と芭蕉の俳句」
④⑦	4.11.10	ウィリアム D. ジョンストン William D. JOHNSTON (ウェスリアン大学助教授・日文研客員助教授) 「日本疾病史考—『黴毒』の医学的・文化的概念の形成」
④⑧	4.12. 8	マノジュ L. シュレスト Manoj L. SHRESTHA (甲南大学経営学部講師) 「アジアにおける日系企業の戦略転換 —技術移転をめぐる—」

④9	5. 1.12 (1993)	PARK Jung-Wei 朴 正義 (圓光大学校師範大学副教授・日文研来訪研究員) 「キリスト教受容における日韓比較」
50	5. 2. 9	マーティン・コルカット Martin COLLCUTT (プリンストン大学教授・日文研客員教授) 「伝説と歴史の間—北條政子と宗教」
⑤1	5. 3. 9	Yoshiaki SHIMIZU 清水 義明 (プリンストン大学マーカンド荣誉教授) 「チャールズ L. フリアー (1854~1919) とフリアー美術館 —米国の日本美術コレクションの一例として—」
⑤2	5. 4.13	KIM Choon Mie 金 春美 (高麗大学校教授・日文研来訪研究員) 「日本近代知識人の思想と実践—有島武郎の場合—」
53	5. 5.11	タキエ・スギヤマ・リブラ Takie SUGIYAMA LEBRA (ハワイ大学教授) 「皇太子妃選択の象徴性 —旧身分文化との関連を中心として—」
54	5. 6. 8	H. W. KANG 姜 希雄 (ハワイ大学教授・日文研客員教授) 「変革と選択: 10世紀の日本と朝鮮 —科学制度をめぐる—」
⑤5	5. 7.13	ツベタナ・クリステワ Tzvetana KRISTEVA (ソフィア大学教授・日文研客員教授) 「涙の語り—平安朝文学の特質—」
⑤6	5. 9.14	KIM Yong-Woon 金 容雲 (漢陽大学教授・日文研客員教授) 「和算と韓算を通して見た日韓文化比較」
⑤7	5.10.12	オロフ G. リディン Olof G. LIDIN (コペンハーゲン大学教授・日文研客員教授) 「徳川時代思想における荻生徂徠」
⑤8	5.11. 9	マヤ・ミルシンスキー Maja MILCINSKI (スロベニア・リュブリアナ大学助教授・日文研客員助教授) 「無常観の東西比較」
59	5.12.14	ウィリー・ヴァンドゥワラ Willy VANDEWALLE (ベルギー・ルーヴァン・カトリック大学教授・日文研客員教授) 「日本・ベルギー文化交流史—南蛮美術から洋学まで—」
60	6. 1.18 (1994)	J. マーティン・ホルマン J. Martin HOLMAN (ミシガン州立大学連合日本センター所長) 「自然と偽作—井上靖文学における『陰謀』—」

61	6. 2. 8 (1994)	マイヤ・ゲラシモア Maya GERASIMOVA (ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員) 「外から見た日本文化と日本文学 —俳句の可能性を中心に—」
62	6. 3. 8	オギュスタン・ベルク Augustin BERQUE (フランス・社会科学高等研究院教授・日文研客員教授) 「和辻哲郎の風土論の現代性」
⑥3	6. 4.12	リチャード・トランス Richard TORRANCE (オハイオ州立大学助教授) 「出雲地方に於ける読み書き能力と現代文学、1880～1930」
64	6. 5.10	シルバーノ D. マヒウオ Sylvano D. MAHIWO (フィリピン大学アジアセンター準教授) 「フィリピンにおける日本現状紹介の諸問題」
65	6. 6.14	LIU Jian Hui 劉 建輝 (南開大学副教授・日文研客員助教授) 「『魔都』体験—文学における日本人と上海」
66	6. 7.12	チャールズ J. クイン Charles J. QUINN (オハイオ州立大学準教授・東北大学客員教授) 「私の日本語発見—王朝文を中心に—」
67	6. 9.13	フランソワ・マセ François MACE (フランス国立東洋言語文化研究所教授・日文研客員教授) 「幻の行列—秀吉の葬送儀礼—」
⑥8	6.11.15	JIA Hui-xuan 賈 蕙萱 (北京大学助教授・日文研客員助教授) 「中日比較食文化論—健康的飲食法の研究—」
69	6.12.20	PENG Fei 彭 飛 (日本学術振興会特別研究員) 「日本語の表現からみた—異文化摩擦のメカニズム—」
⑦0	7. 1.10 (1995)	ミハイル V. ウスペンスキー Michail V. USPENSKY (エルミタージュ美術館学芸員・日文研客員助教授) 「根付—ロシア・エルミタージュ美術館のコレクション を中心に—」
⑦1	7. 2.14	YAN Shao Dang 嚴 紹 澐 (北京大学教授・日文研客員教授) 「記紀神話における二神創世の形態—東アジア文化とのか かわり—」

72	7. 3.14 (1995)	WANG Jiahua 王 家驊 (南開大学教授・日文研客員教授) 「渋沢栄一の『論語算盤説』と日本的な資本主義精神」
73	7. 4.11	アリソン・トキタ Alison TOKITA (モナシユ大学助教授・日文研客員助教授) 「日本伝統音楽における語り物の系譜—旋律型を中心に—」
74	7. 5. 9	リュドミーラ・エルマコワ Lioudmila ERMAKOVA (ロシア科学アカデミー東洋学研究所極東文学課長) 「和歌の起源—神話と歴史—」
75	7. 6. 6	パトリシア・フィスター Patricia FISTER (日文研客員助教授) 「近世日本の女性画家たち」
76	7. 7.25	CHOI Kil-Sung 崔 吉城 (広島大学総合科学部教授) 「『恨』の日韓比較の一考察」
77	7. 9.26	SU Dechang 蘇 徳昌 (奈良大学教養部教授) 「日中の敬語表現」
78	7.10.17	LI Jun Yang 李 均洋 (西北大学副教授・日文研来訪研究員) 「雷神思想の源流と展開—日・中比較文化考—」
79	7.11.28	ウィリアム・サモニデス William SAMONIDES (カンザス大学助教授・日文研客員助教授) 「豊臣秀吉と高台寺の美術」
80	7.12.19	タチヤーナ・L. ソコロワ・デリュシナ Tatyana L. SOKOLOVA-DELYUSINA (翻訳家・日文研来訪研究員) 「俳句の国際性—西欧の俳句についての一考察—」
81	8. 1.16 (1996)	ジョン・クラーク John CLARK (シドニー大学助教授・日文研客員助教授) 「日本の近代性とアジア：絵画の場合」
82	8. 2.13	ジェイ・ルービン Jay RUBIN (ハーバード大学教授・日文研客員教授) 「京の雪、能の雪」
83	8. 3.12	イザベル・シャリエ Isabelle CHARRIER (神戸大学国際文化学部外国人教師) 「日本近代美術史の成立—近代批評における新語—」

⑧4	8. 4.16 (1996)	リース・モートン Leith MORTON (ニューキャッスル大学教授・日文研客員教授) 「日本近代文芸におけるゴシック風小説」
⑧5	8. 5.28	マーク・コウディ・ポウルトン Mark Cody POULTON (ヴィクトリア大学助教授・日文研客員助教授) 「能における『草木成仏』の意味」
⑧6	8. 6.11	フランシスコ・ハビエル・タブレロ Francisco Javier TABLERO (慶應義塾大学訪問講師) 「社会的構築物としての相撲」
87	8. 7.30	シルヴァン・ギニヤール Sylvain GUIGNARD (大阪学院大学助教授) 「筑前琵琶—文化を語る楽器」
88	8. 9.10	ハーバート E. プルチョウ Herbert E. PLUTSCHOW (カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授・日文研客員教授) 「怨霊の領域」
⑧9	8.10. 1	WANG Xiu-wen 王 秀文 (東北民族学院助教授・日文研客員助教授) 「シャクシ・女・魂 —日本におけるシャクシにまつわる民間信仰—」
90	8.11.26	WANG Bao Ping 王 宝平 (杭州大学日本文化研究所副所長・日文研客員助教授) 「明治期に来日した中国人の外交官たちと日本」
⑨1	8.12.17	CHEN Shen Bao 陳 生保 (上海外国語大学教授・日文研客員教授) 「中国語の中の日本語」
⑨2	9. 1.21 (1997)	アレキサンダー N. メシエリヤコフ Alexander N. MESHCHERYAKOV (ロシア科学アカデミー東洋学研究所教授・日文研来訪研究員) 「奈良時代の文化と情報」
93	9. 2.18	KWAK Young-Cheol 郭 永喆 (韓国・漢陽大学文科大学長・日文研客員教授) 「言語から見た日本」
⑨4	9. 3.18	マリア・ロドリゲス・デル・アリスアル Maria RODRIGUEZ DEL ALISAL (スペイン・マドリード国立外国語学校助教授・日本学研究所所長) 「弁当と日本文化」

95	9. 4.15 (1997)	ミケーレ・F・マールラ Michele F. MARRA (カリフォルニア大学ロサンゼルス校準教授・日文研客員助教授) 「弱き思惟—解釈学の未来を見ながら」
96	9. 5.13	デニス・ヒロタ Dennis HIROTA (京都浄土真宗翻訳シリーズ主任翻訳家 パークレー仏教研究所準教授) 「日本浄土思想と言葉 —なぜ一遍が和歌を作って、親鸞が作らなかったか」
97	9. 6.10	ヤン・シ・コラ Jan SYKORA (チェコ・カレル大学助教授・日文研客員助教授) 「近世商人の世界—三井高房『町人考見録』を中心に—」
98	9. 7. 8	キンヤ・ツルタ 鶴田 欣也 (ブリティッシュコロンビア大学教授・日文研客員教授) 「向こう側の文学—近代からの再生—」
99	9. 9. 9	ポーリン・ケント Pauline KENT (龍谷大学助教授) 「『菊と刀』のうら話」
100	9.10.14	セオドア・ウィリアム・グーセン Theodore William GOOSSEN (ヨーク大学準教授・日文研客員助教授) 「『日本文学』とは何か—21世紀に向かって」
101	9.11.11	KIM Uchang 金 禹昌 (高麗大学校文科大学教授・日文研客員教授) リヴィア・モノネ Livia MONNET (モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) カール・モスク Carl MOSK (ヴィクトリア大学教授・日文研客員教授) ヤン・シ・コラ Jan SYKORA (カレル大学助教授・日文研客員助教授) キンヤ・ツルタ 鶴田 欣也 (ブリティッシュコロンビア大学教授・日文研客員教授) パネルディスカッション 「日本および日本人—外からのまなざし」
102	9.12. 9	ジョナ・サルズ Jonah SALZ (龍谷大学助教授) 「猿から尼まで—狂言役者の修業」
103	10. 1.13 (1998)	KANG Shin-pyo 姜 信杓 (仁済大学校人文社会科学研究所教授・日文研客員教授) 「京都考見録：韓国文化人類学者の経験」

⑩4	10. 2.10 (1998)	GAO Wenhan 高 文漢 (山東大学教授・日文研客員教授) 「中世禅林の異端者——休宗純とその文学」
105	10. 3. 3	シュテファン カイザー Stefan KAISER (筑波大学教授) 「和魂漢才、和魂洋才——語彙・表記に見る日本文化の特性」
106	10. 4. 7	スミエ A. ジョーンズ Sumie A. JONES (インディアナ大学教授・日文研客員教授) 「幽霊と妖怪の江戸文学」
107	10. 5.19	リヴィア・モネ Livia MONNET (モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) 「映画と文学の間に——金井美恵子の小説における映画的身体」
⑩8	10. 6. 9	Hiroshi SHIMIZAKI 島崎 博 (レスブリッジ大学教授・日文研客員教授) 「化粧の文化地理」
⑩9	10. 7.14	Peipei QIU 丘 培培 (バツサー大学助教授・日文研来訪研究員) 「なぜ荘子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか ——詩的イメージとしての典故——」
110	10. 9. 8	ブルーノ・リーネル Bruno RHYNER (チューリッヒ大学講師・ユング派精神分析家・日文研客員助教授) 「日本の教育がかかえる問題点」
⑪1	10.10. 6	アハマド・ムハマド・ファトヒ・モスタファ Ahmed M. F. MOSTAFA (カイロ大学講師・日文研客員助教授) 「『愛玩』——安岡章太郎の『戦後』のはじまり」
⑪2	10.11.10	アリソン・トキタ Alison McQUEEN-TOKITA (モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) 「『道行き』と日本文化——芸能を中心に」
113	10.12. 8	グレン・フック Glenn HOOK (シェフィールド大学教授・東京大学客員教授) 「地域主義の台頭と東アジアにおける日本の役割」
⑪4	11. 1.12 (1999)	DU Qin 杜 勤 (華東師範大学助教授・華東師範大学外国語学院 第2学部副学部長・日文研客員助教授) 「『中』のシンボリズムについて——宇宙論からのアプローチ」

115	11. 2. 9 (1999)	シーラ・スミス Sheila SMITH (ボストン大学助教授・日文研客員助教授) 「日本の民主主義—沖縄からの挑戦」
⑪①⑥	11. 3.16	エドウィン A. クランストン Edwin A. CRANSTON (ハーバード大学教授・日文研客員教授) 「うたの色々：翻訳は詩歌の詩化または死化？」
⑪①⑦	11. 4.13	ウィリアム J. タイラー William J. TYLER (オハイオ州立大学助教授・日文研客員助教授) 「石川淳著『黄金傳説』その他の翻訳について」
⑪①⑧	11. 5.11	KIM Ji Kyun 金 知見 (韓国・仏教教育大学大学院長・日文研客員教授) 「内藤湖南先生の眞蹟—高麗太祖顕陵詩」
119	11. 6. 8	マリア・ヴォイヴォディッチ Marija VOJVODIC (モンテネグロ共和国政府民営化推進部外資担当課長・ 日文研客員助教授) 「言葉いろいろ—日本の言葉に反映された文化の特徴」
⑪②⑩	11. 7.13	REECE Sachiko Taki リース・幸子 滝 (米国・ケドレン精神衛生センター箱庭療法トレーニングコン サルタント・日文研客員助教授) 「心理臨床の場に映った私生活の中の暴力と社会の中の暴力」
⑪②①	11. 9. 7	SONG Min 宋 敏 (韓国・国民大学校文化大学学長・日文研客員教授) 「明治初期における朝鮮修信使の日本見聞」
⑪②②	11.10.12	ジャン・ノエル・A. ロベール Jean-Noël A. ROBERT (フランス・パリ国立高等研究院教授・日文研客員教授) 「二十一世紀の漢文—死語の将来—」
⑪②③	11.11.16	ヴラディスラフ・ニカノロヴィッチ・ゴレグリアド Vladislav Nikanorovich GOREGLIAD (ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク 支部極東部長・日文研客員教授) 「鎖国時代のロシアにおける日本水夫たち」
⑪②④	11.12.14	X. Jie YANG 楊 曉捷 (カルガリー大学準教授・日文研客員助教授) 「鬼のいる光景—絵巻『長谷雄草紙』を読む—」

⑫5	12. 1.11 (2000)	エミリア・ガ デ レ ヲ Emilia GADELEVA (日文研中核的研究機関研究員) 「年末・年始の聖なる夜 —西欧と日本の年末・年始の行事の比較的研究」
⑫6	12. 2. 8	LEE Eung Soo 李 応寿 (世宗大学校副教授・日文研客員助教授) 「東アジア獅子舞の系譜—五色獅子を中心に—」
127	12. 3.14	アンナ・マリア・トレ ー ン ハ ル ト Anna Maria THRÄNHARDT (デュッセルドルフ大学教授・日文研客員教授) 「皇室と日本赤十字社の始まり」
⑫8	12. 4.11	ペ ッ カ ・ コ ル ホ ネ ン Pekka KORHONEN (ユワスクラ大学教授・日文研客員助教授) 「アジアの西の境」
⑫9	12. 5. 9	KIM Jeong Rye 金 貞禮 (国立全南大学校副教授・日文研客員助教授) 「五・七・五、日本と韓国」
⑬0	12. 6.13	ケ ネ ス L. リ チ ャ ー ド Kenneth L. RICHARD (県立長崎シーボルト大学教授・日文研客員教授) 「出島—長崎—日本—世界 憧憬の旅 サダキチ・ハルトマン (1867—1944) と倉場富三郎 (1871—1945)」
131	12. 7.11	リュドミラ・ホロド ヴ ィ ッ チ Lyudmila HOLODOVICH (ソフィア大学助教授・日文研客員助教授) 「お盆と正教の五旬祭—比較的なアプローチ—」
⑬2	12. 9.12	マー ク ・ メ リ Mark MELI (日文研外来研究員) 「『物のあはれ』とは何なのか」
133	12.10.10	リチャード・ルビン ジャ ー Richard RUBINGER (インディアナ大学教授・日文研客員教授) 「読み書きできなかったのは誰か—明治の日本」
⑬4	12.11.14	SHIN Yong-tae 辛 容泰 (東国大学校日本学研究所研究員・日文研客員教授) 「日本語の『カゲ(光・蔭)』外—日本文化のルーツを探る—」
135	12.12.12	CAI Dun da 蔡 敦達 (同済大学日本学研究所助教授・日文研客員助教授) 「中国文人が観た明治日本—旅行記を読む—」

⑬③⑥	13. 2. 6 (2001)	バルト・ガーンズ Bart GAENS (日文研中核的研究機関研究員) 「長者の山—近世的经营の日欧比較—」
137	13. 3. 6	ポール・S. グローナー Paul S. GRONER (ヴァージニア大学教授・日文研客員教授) 「仏教の戒律とは何か？」
⑬③⑧	13. 4.10	LI Zhuo 李 卓 (南開大学教授・日文研客員教授) 「中日姓名の比較について—親族の血縁性と社会性—」
⑬③⑨	13. 5. 8	エッケハルト・マイ Ekkehard MAY (フランクフルト大学教授・日文研客員教授) 「西洋における俳句の新しい受容へ」
⑬④①	13. 6.12	XU Subin 徐 蘇斌 (日文研外国人研究員) 「中国現代建築の成立基盤—留日建築家・趙冬日と人民大会堂—」
141	13. 7.10	ヘンリー D. スミス Henry D. SMITH, II (コロンビア大学教授 日文研外国人研究員) 「忠臣蔵再考—四十七士の三百年—」
⑬④②	13. 9.18	ジョナサン M. オーガスティン Jonathan M. AUGUSTINE (日文研外来研究員) 「聖人伝、高僧伝と社会事業—古代日本、ヨーロッパの高僧を中心に—」
143	13.10. 9	アレクサンダー・ボビン Alexander VOVIN (ハワイ大学準教授・日文研客員助教授) 「日韓上代言語域：神と国と人と」
144	13.11.13	GUAN Wen Na 官 文娜 (日文研外国人研究員) 「日本社会における『近親婚』と中国の『同姓不婚』との比較」
145	13.12.11	チグサキムラステイブン Chigusa KIMURA-STEVEN (ニュージーランド・カンタベリー大学準教授・日文研外国人研究員) 「大庭みな子『三匹の蟹』：ミニスカ文化の中の女と男」
⑬④⑤	14. 1.15 (2002)	SHIN Chang Ho 申 昌浩 (日文研中核的研究機関研究員) 「親日仏教と韓国社会」

⑭	14. 2.12 (2002)	マシミリアーノ ト マ シ Massimiliano TOMASI (ウェスタン ワシントン大学準教授・日文研外国人研究員) 「近代詩における擬声語について」
148	14. 3.12	JEONG Hye Kyeong 鄭 恵卿 (世宗大学校人文科学大学副教授・日文研外国人研究員) 「日韓言語文化の比較—語る文化と語らぬ文化—」
149	14. 4. 9	マツシュー フィリップ マッケルウェイ Matthew Philip McKELWAY (ニューヨーク大学助教授・日文研外国人研究員) 「初期洛中洛外図の人脈と武家作法—三条本を中心に—」
150	14. 5.14	LEE Kwang Joon 李 光濬 (東西心理学研究所所長・日文研外国人研究員) 「禅心理学的生命観」
⑮	14. 6.11	LU Yi 魯 義 (中国・北京外国問題研究会教授・日文研外国人研究員) 「中日関係と相互理解」
152	14. 7. 9	アレクシア ボ ロ Alexia BORO (イタリア カ・フォスカリ大学助手・日文研外国人研究員) 「建物と権力—明治初期の東京の建築について」
153	14. 9.10	YEE Milim 李 美林 (日文研外国人研究員) 「近世後期『美人風俗図』の絵画的特徴—日韓比較—」
154	14.10. 8	マルクス リュッターマン Markus RÜTTERMANN (日文研外国人研究員) 「伝授から伝統へ—中・近世日本における『啓蒙』の一面について」
⑯	14.11. 5	KIM Moon Gil 金 文吉 (韓国・釜山外国語大学校教授・日文研外国人研究員) 「神代文字と日本キリスト教—国学運動と国字改良」
156	14.12.10	スーザン L. バーンズ Susan L. BURNS (米・シカゴ大学準教授・日文研外国人研究員) 「問題化された身体—明治時代における医学と文化」

157	15. 1.14 (2003)	デビッド L. ハウエル David L. HOWELL (米・プリンストン大学準教授・日文研外国人研究員) 「天保七年常州那珂湊仇討ち一件顛末」
158	15. 2.18	Zhan Xiaomei 戦 曉梅 (日文研研究機関研究員) 「隠逸山水に秘められた『近代』—富岡鉄斎を読む—」
159	15. 3.11	リチャード H. オカダ Richard H. OKADA (米・プリンストン大学準教授・日文研外国人研究員) 「『母国語』とは誰の言葉? : 言語と国民国家」
①60	15. 4. 8	ビル スウェル Bill SEWELL (カナダ・セントメアリー大学助教授・日文研外国人研究員) 「旧満州における戦前日本の町づくり活動」
161	15. 5.20	Park JeonYull 朴 銓烈 (韓国中央大学校教授・日文研外国人研究員) 「神々の使者に扮装する愉しみ—門付け儀礼の演劇性をめぐって—」
162	15. 6.10	REHEM YongTack 林 容澤 (韓国・仁荷大学校副教授・日文研外国人研究員) 「詩の翻訳は可能か—金素雲訳『朝鮮詩集』の場合—」
163	15. 7. 8	ボイカ エリト ツィゴバ Boyka Elit TSIGOVA (ブルガリア・ソフィア大学準教授・日文研外国人研究員) 「ブルガリア人の日本文化観—その理解と日本文芸作品の翻訳をめぐって—」
164	15. 9. 9	インゲ マリア ダニエルズ Inge Maria DANIELS (ロイヤル・カレッジ・オブ・アート客員講師・日文研外来研究員) 「現代住宅に見られる日本人と『モノ』の関わり方」
①65	15.10.14	WANG Cheng 王 成 (首都師範大学助教授・日文研外国人研究員) 「阿部知二が描いた“北京”」
①66	15.11.11	CHEN Hui 陳 暉 (中国社会科学院亚太日本研究所研究員教授・日文研外国人研究員) 「明治教育家 成瀬仁蔵のアジアへの影響—家族改革をめぐって—」

167	15.12. 9 (2003)	エフゲーニー S. バクシェーフ Evgeny S. BAKSHEEV (国立ロシア文化研究所研究員・日文研外国人研究員) 「人と神とが出会う場所 沖縄県宮古諸島の聖地・場所—その構造と形態を中心として—」
168	16. 4.13 (2004)	MIN Joosik 閔 周植 (韓国・嶺南大学校教授・日文研外国人研究員) 「風流の東アジア—美を生きる技法—」
169	16. 5.11 (2004)	CONSTANTIN NOMIKOS VAPORIS Constantine Nomikos VAPORIS (米国・メリーランド大学準教授・日文研外国人研究員) 「参勤交代と日本の文化」
170	16. 6. 8 (2004)	WANG Shukun 王 述坤 (中国・東南大学教授・日文研外国人研究員) 「近代における日本、中国の文人・作家の自殺」
171	16. 7.13 (2004)	ВИКТОР ВИКТОРОВИЧ РИБИН Victor Victorovich RYBIN (ロシア・サンクトペテルブルグ大学助教授・日文研外国人研究員) 「知られざる歌麿—『百千鳥狂歌合はせ』の詩的、文法的分析」

○は報告書既刊

なお、報告書の全文をホームページで見ることが出来ます。

<http://www.nichibun.ac.jp/dbase/forum.htm>

発行日 2004年9月30日
編集発行 国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話 (075) 335-2048
ホームページ: <http://www.nichibun.ac.jp>

© 2004 国際日本文化研究センター

■ 日時

2003年10月14日（火）

午後1時～3時

■ 会場

キャンパスプラザ京都

第二十五回

阿部知二が描いた北京

王成

国際日本文化研究センター